ランドスケープシンポジウム 2009　　報告書

テーマ

大通公園１００年　これからの１００年

大通逍遥地の変遷から考える　公園緑地の未来

平成 21 年 12 月
ランドスケープシンポジウム実行委員会

ランドスケープシンポジウム 2009　　報告書

テーマ

大通公園１００年　これからの１００年

大通逍遥地の変遷から考える　公園緑地の未来

日時：平成 21 年 7 月 5 日（日）13：00～17：30
場所：大通公園　　札幌市教育文化会館 301 会議室

第１部　大通公園ミニツアー
第２部　大通公園　これからの１００年を考えるシンポジウム

主催：ランドスケープシンポジウム実行委員会
共催：（社）日本造園学会北海道支部、(社)北海道造園緑化建設業協会、（社）日本造園建設業協会北海道総支部、（社）ランドスケープコンサルタンツ協会北海道支部
後援：北海道開発局、北海道、札幌市、財)札幌市公園緑化協会、NPO 法人ｶﾞｰﾃﾞﾝｱｲﾗﾝﾄﾞ北海道

平成 21 年 12 月

はじめに

LAシンポジウム2009実行委員会を代表して、「大通公園１００年 これからの１００年 大通逍遥地の変遷から考える 公園緑地の未来」シンポジウム開催にあたり、ご尽力、ご後援を頂戴した関係各位の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

当日、第一部、大通ウオッチングでは突然の雨に見舞われるというハプニングがありましたが、多くの市民の参加があり、講師の方々の熱心な説明もあって、多くの方々から好評を頂戴することができました。

また、第二部におきましても、小林英嗣先生の基調講演では、大通の七不思議という話題から始まり、札幌都心にある大通のありようについて示唆に富むお話をいただきました。
パネリストの石村さん、石田さん、大塚さんからは、それぞれの経歴や実務を背景に、興味深い話題提供をいただき、その後のパネルディスカッションにおきましても、聴衆の方々の意見を端緒に、興味深い論議を行うことができました。

本報告書は、当日会場へお見えになれなかった方、そして、次年度以降に引き続き開催される予定の LA シンポジウムへの引き継ぎ書という意図をもって、とりまとめたものです。

内容的には、不十分な点が多々あることを承知の上で、報告をさせていただくことにいたしました。今回のシンポジウムに対するご意見、ご批判、ご示唆をいただくことで、それを契機にし、札幌都心の緑地のありようを論議する場となれば幸いです。

ランドスケープシンポジウム 2009 実行委員会
代表　　小林　昭裕

概　　要

大通公園は、1908（明治 41）年に札幌市が、当時、造園の権威であった長岡安平（東京市）に逍遥地（散歩などをする所）の設計を依嘱し、1909（明治 42）年に着工とされています。2009 年は、その着工から、数えて 100 年の節目にあたります。この節目を契機に、公園ウオッチングやシンポジウムを行い、これまで大通公園の果たして来た役割やこれからの未来像を、専門家と市民の方を交えて情報交換を行い、議論を発信していきたいと思います。

第１部　大通公園ミニツアー

専門家の案内により大通公園をウオッチングします。（札幌テレビ塔から、12 丁目バラ園まで）
大通公園の歴史って？　どんな木が植えられているの？
花壇コンクールはいつから始まったの？　今どんな問題があるの？
・時間：13：00～14：20（教育文化会館着）
・参加者：先着４０名　事前に申し込みが必要です。
・案内人：笠　康三郎　（社：日本造園学会北海道支部長）
高橋　克夫　（元大通公園管理事務所）
石村　寛人　（札幌市北区土木部長）

第２部　大通公園　これからの１００年を考えるシンポジウム

１．挨拶および本シンポジウムの趣旨説明　14：30～14：40　小林　昭裕
（ランドスケープシンポジウム実行委員会　委員長）
２．基調講演 14：40～15：30
都市の顔としての大通公園　これからの１００年を展望して
小林英嗣さん（北海道大学大学院教授）
３．パネルディスカッション 15：40～17：20
パネリストの皆さん
○今の大通公園はこうして創られた
石村　寛人さん（札幌市北区土木部長）
○市民から見た公園の利用
石田　哲也さん（前田森林公園凸凹クラブ代表）
○公園の価値を高め、市民に愛される公園へ～先進事例の紹介から～
大塚　守康さん（社：ランドスケープコンサルタンツ協会会長）

進行役：小林　昭裕（専修大学北海道短期大学）

４．主催者より終了の挨拶
笠　康三郎（日本造園学会北海道支部長）17：20～17：30

第１部　大通公園ミニツアー

☆　案内人
笠　康三郎　(日本造園学会北海道支部長)
高橋　克夫　(元大通公園管理事務所)
石村　寛人　（札幌市北区土木部長）

大通公園はいくつもの顔を持っている。
用地はあくまで道路のままなので、86 年には『日本の道百選』に選ばれ、道路敷の中央部を都市公園として利用していることから 89 年には『日本の都市公園百選』に、高い水準の都市空間デザインが行われていることにより、91 年には『都市景観百選』に選ばれている。

実際の利用形態や植栽・施設をみても、他の公園にはみられない特色にあふれている。
・ 雪まつりや YOSAKOI ソーランなど四季を通じて行われている様々なイベント。
・ 50 年以上の歴史を持っており、観光客に大人気の華やかな花壇。
・ 世界的に有名なイサムノグチのブラックスライドマントラを初め、特色のある様々な彫刻や記念碑の数々。
・ 札幌のシンボルツリーである香り豊かなライラックや、大きな緑陰を広げている６丁目のケヤキ、札幌では珍しいユリノキなど様々な特色のある樹木　など。

しかも火防線として設定された歴史的な変遷の中で、既に明治９年にはアメリカから導入された様々な花の見本園として花壇が造成されたり、勧業博覧会など様々な催し物の場所として活用されるなど、わが国の公園史の中でも際だった利用形態を持っていたことが特筆されよう。

明治 42 年には、当時のわが国における造園計画の権威であった長岡安平氏に植栽設計を依頼し、円山公園や中島公園と共に近代的な公園整備が行われたことにより、まさに札幌のシンボル的な公園として市民に親しまれる緑地空間であり続けてきたのである。

シンポジウムに先だって行われるミニツアーでは、東端のテレビ塔から西端の資料館まで歩きながら、目に見える施設や植栽やイベントの賑わいだけでなく、歴史的な価値を振り返りつつ整備や管理の裏舞台についても話題提供を行うことを心掛けた。
以下に、各丁目毎のポイントを簡単に整理する。

【１丁目】
・ 大通公園の範囲は、テレビ塔の部分は含まれず、１丁目の西半分から 12 丁目までである。
・ 豊平館が昭和 32 年に移転した後にテレビ塔とＮＨＫが建設された。

【２丁目】
・ 市民会館の前にあるハルニレの古木は、札幌景観資産の第１号に指定された樹木であり、もっと大切に保全する必要がある。

【３丁目】
・ 大通における花壇の歴史は、明治９年の御雇い外国人ルイスベーマーによる花草園に始まり、明治末期の小川二郎や大正初めの戸部佶による私費での花壇造成が既に行われており、戦後の花壇推進組合による花壇造成は、それらの歴史の延長上にある。

【４丁目】
・ 札幌のシンボルツリーがライラックになったのは、吉井勇の「家ごとにリラの花咲き札幌の　人は楽しく生きてあるらし」の歌が影響を及ぼし、その歌碑が建てられている。

【５丁目】
・ 戦前の陸軍大演習を記念して建立された『聖恩無疆』の碑の由来や再整備時の苦労など。
・ 北側にあるユリノキの大木の由来について。

【６丁目】
・ 明治 19 年に偕楽園に建立された「開拓記念碑」は、明治 32 年の現在地に移転し、その時にケヤキが植えられている。
・ この区画は元もと地盤が低く、両側にあった沈床園のレベルであったが、利用しづらいので埋められてしまい、ケヤキの生育不良の原因になっている。

【８～９丁目】
・ イサムノグチのブラックスライドマントラ設置時の話題や、道路をつぶして連続化した経緯などについて。
・ くじら森の由来と園地整備時のイサムノグチの関わりなどについて。

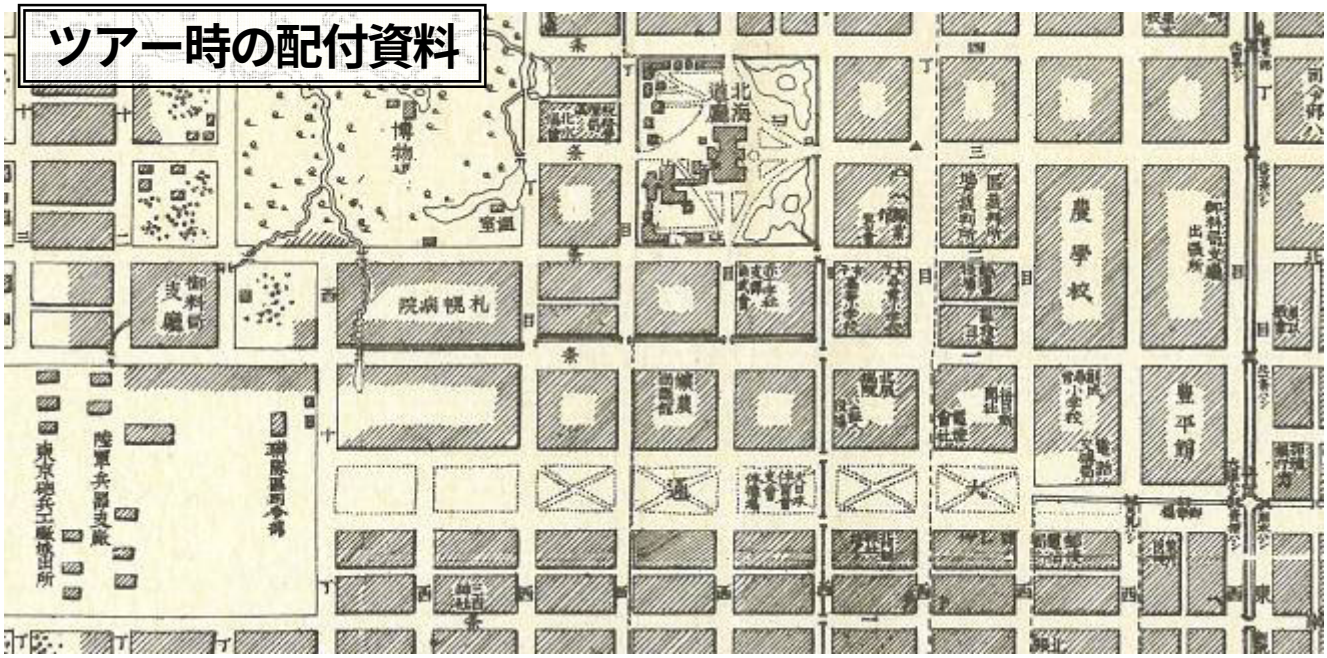
【10 丁目】
・ 大通には、明治時代に黒田清隆、岩村通俊、永山武四郎の三つの銅像があったが、戦時中に供出されてしまった。昭和 42 年の開道百年を記念して、ケプロンと黒田の銅像をここに建て、岩村像は円山公園に、永山像は屯田兵ゆかりの旭川常盤公園に建てられている。

【11 丁目】
・ 72 年に、ミュンヘンとの姉妹都市提携を記念してマイバウムが立てられた。その後台風で折れたので、鉄製にして 01 年に現在のものが立てられている。

【12 丁目】
・ 元もと小さなバラ花壇があったが、再整備時に６丁目の沈床園の代わりに、ここにサンクンガーデンを取り入れたバラ園を整備した。

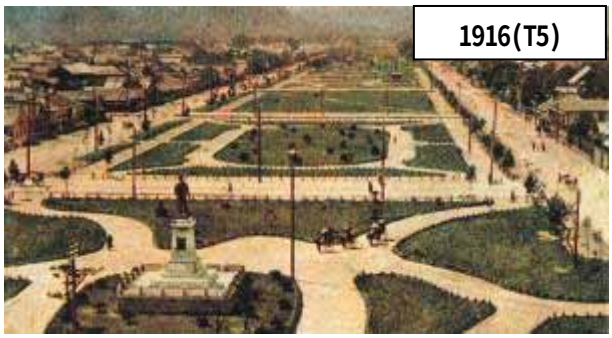
【13 丁目】
・ この区画も大通公園の区域ではなく、管理も教育委員会管轄となっている。
・ 戦後すぐには、大通公園を円山まで繋げるという話もあったが、都市化の進展によって実現できなかった経緯がある。

ツアー時の配付資料

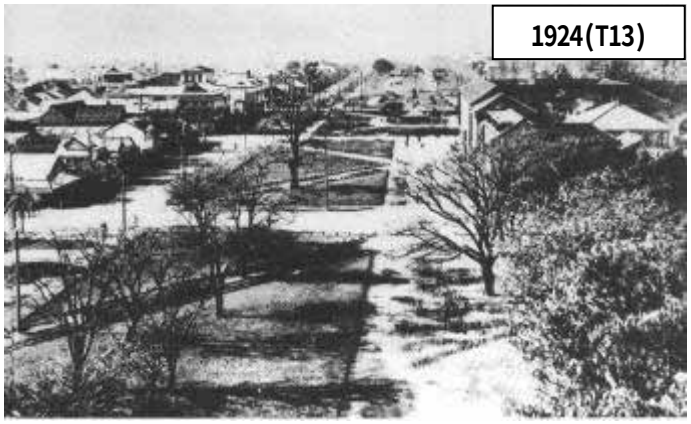


1910(M43)

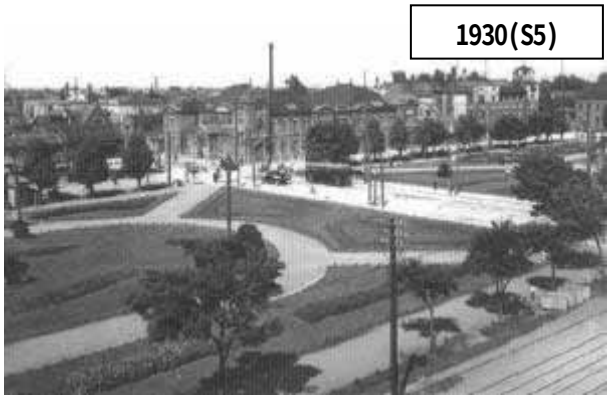
1916(T5)



1924(T13)

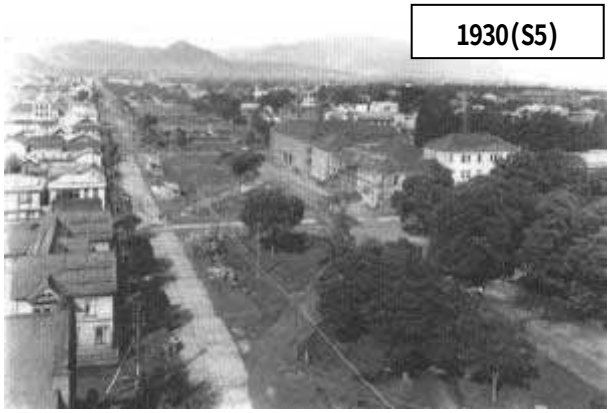


1930(S5)

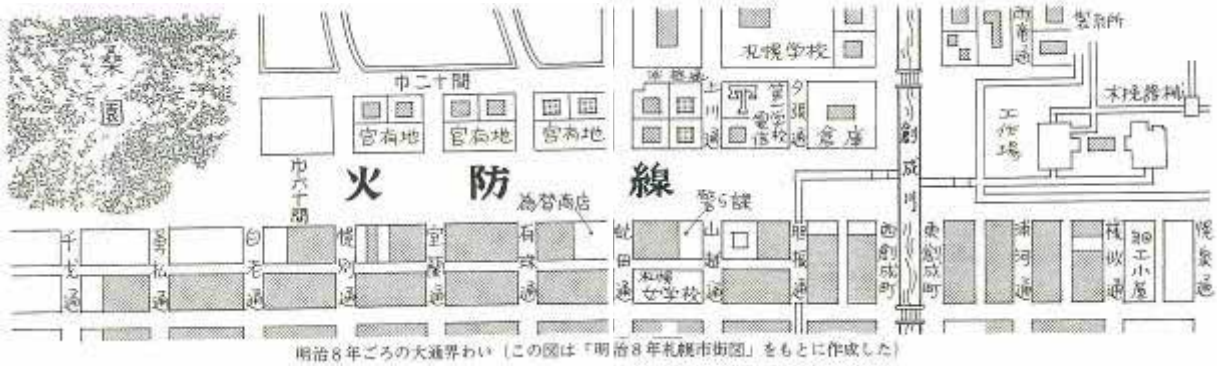


1935(S10)

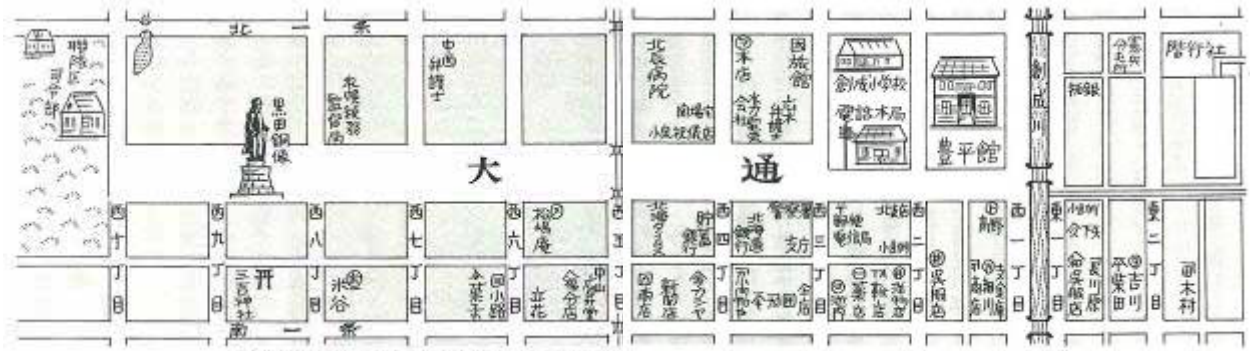
1930(S5)



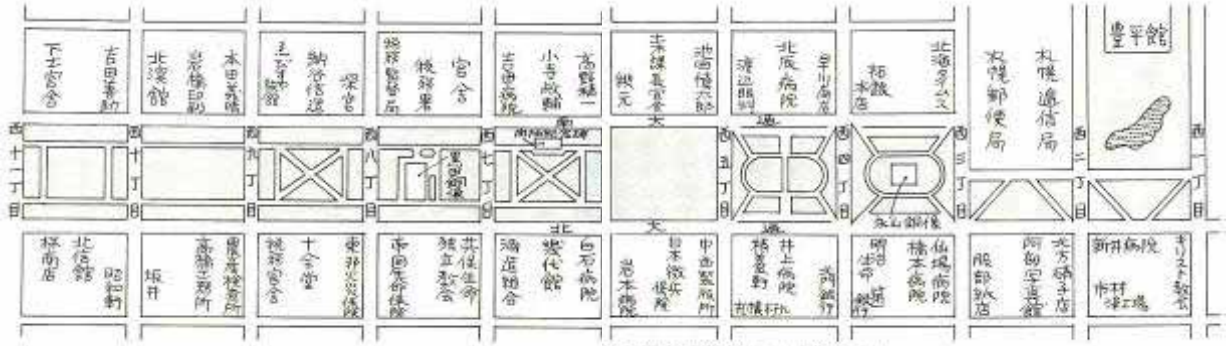
大通周辺の変遷



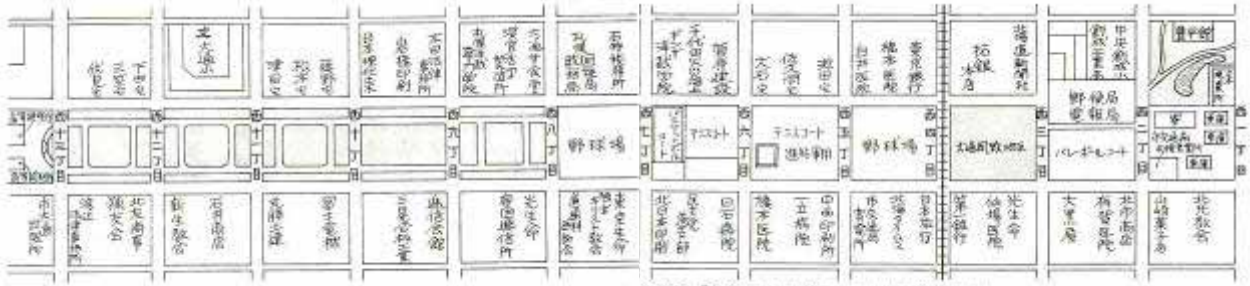
明治8年ごろの大通界わい（この図は「明治8年札幌市街図」をもとに作成した）



明治39年ごろの大通界わい（この図は明治39年発行の「札幌市街明細案内図」をもとに作成した）



昭和初期の大通界わい（この図は昭和2年の住宅地図をもとに作成した）



昭和25年ごろの大通界わい（この図は昭和25年発行の「札幌市卓上案内」をもとに作成した）

『さっぽろ　大通』札幌の歴史を楽しむ会、1981(S56)、新北海道教育新報社　より

ランドスケープシンポジウム 2009

テーマ

大通公園 100 年　これからの 100 年

大通逍遥地の変遷から考える　公園緑地の未来

第 2 部　シンポジウム

基調講演

「都市の顔としての大通公園　これからの 100 年を展望して」
北海道大学大学院　教授　小林　英嗣(こばやし　ひでつぐ)　氏

☆　プロフィール
1969 年 3 月　北海道大学　建築学科卒業
1971 年 3 月　同　大　大学院工学研究院修士課程終了
1971 年 4 月　同　大　助手
1986 年 4 月　同　大　助教授
1995 年 4 月　同　大　大学院教授
2003 年 5 月　中国･同済大学　客員教授

☆　主な著書
1999 年 「安全と再生の都市づくり」学芸出版社
2001 年 「建築設計資料集成」(共著)丸善
2002 年 「公共事業は誰のものか」中央公論新社
2003 年 「建築と都市」彰国社
2004 年 「建築設計資料集成(地域･都市)(共著)丸善
2005 年 「キャンパスマネジメントハンドブック」(編著)日本建築学会
2008年　「地域と大学の共創まちづくり」学芸出版社　他

☆　作品
1992 年　北海道立帯広美術館
1995 年　ふれあいの森･積丹
1998 年　北海道大学ファカルティハウス（エンレイソウ）
2001 年　北海道大学遠友学舎
2002 年　札幌コンベンションセンター(監修)
2003 年　札幌駅前広場
2009 年　北海道大学都市建築スタジオ棟　他

以下、基調講演の概要

はじめに：大通公園の歴史を紐解くと、当時、大胆な発想で大通公園が札幌の中心部の計画が創られて、その中で大通公園は重要な役割を負っていた。西は現在の円山公園から東は豊平川に至る大胆な都市の基軸を造ろうとした。そういう起案の延長に私たちは今います。現在が終点ではなく、将来に向けて、足し算をしながら「私たちはこういうものを足したぞ」考えていけるのか、あるいは、創り上げていけるかが問われています。

■大通公園に関する７つの謎：

①大通公園と創成川は豊平川に並んで非常に重要な役割を果たしていますが、本当は何のために創ったのか？円山から豊平川に至る都市の基軸を創るという発想は、どういう真意があったのか？

②なぜ、大通公園は規模や長さを感じないのだろうか？距離的に大きく変わらないシャンゼリゼ（仏・パリ市）を歩くと、すごく長く感じ、シンボリックな印象を与えます。

③百年間の歴史の重み、あるいは100年間に色々なことが札幌の文化として展開されてきましたが、銅像はあるのですが、大通公園を歩いていても、歴史の重みをヒシヒシと、なぜ、感じないのか？

④道路なのか、公園なのか、広場なのか、交通のためなのか、市民の憩いの場なのか、稼ぎ場なのか？

⑤東西に走る大通公園の北大通側は一日中陽が照っており、南大通側からは、光に映えている緑をよく見ることができますが、なぜ、それが周辺のまちづくりに生かされていないのだろう？

⑥大通公園の延伸、東に延びることは、札幌市議会でも説明され了承もえている。しかし、おずおずと東へ伸ばしていいのか・悪いのかといった話を今でもしなければならないのはどうしてなのか？

⑦大通公園を誰が維持管理をしているのだろう？その報酬というのは誰が決めているのだろう？

■大通公園と大通公園周辺のあり方を巡る市民を交えた議論(2003)で指摘された都市景観上の問題点や意見：

(ア)個別の建物が無秩序に建てられて、圧迫感が感じられる。
(イ)札幌の顔となるシンボル空間では無くなっている。逍遥から商用へ。
(ウ)緑を生かした環境になっているのか？
(エ)利用上の問題として、大通公園とその周辺は本来市民のための場であって、建物の１階には多くの利用者が使えるような場所があったらいい。
(オ)都心の歩行者を前提とした交通計画は札幌の街にあるのだろうか？
(カ)お年寄りや子供が大通公園を利用するのに地下鉄は不適切である。

■「札幌の都心再生」街中の賑わいを高めるための大通公園の活用：

成熟している都市として、一つに、歩行者のアメニティと結びついた活性化、一つに、大人や若い人のニーズに合った形で業種、業態を作るのでビジネスチャンスの提供、一つに、大通公園周辺街区に居住するあるいは建物の所有者から利用料金徴収によって、質の高い管理運営を図ってよいであろう。

■「住んでよし、訪れてよし」：
世界中で魅力的だなとして評価されている町は、決して、お店が沢山あるということではない。むしろ、街並みが美しく、生活されている方のアメニティが豊かであることが魅力を図る一つの尺度になっています。
町の豊かさや魅力、文化度に繋がるものの一つに「パブリックライフ」があります。町の中で自由に自分の思いでできること、数人のグループでできること、任意の団体でできること、それは実際に体験したり、見たりすることができます。企業とか学校といった、オフィシャルではない活動が何時も町の中でできる場所を企業が作れないので、どれだけ作れるかが、町の豊かさや町の魅力に繋がります。
コペンハーゲンのど真ん中にあるストロイエ通は、かつて汚い、両側に車が駐車してある商店街でしたが、35 年間掛けて少しずつ街ににぎわいを作り出してきた。少しずつフィッシュボーンのように周辺の街区にも、安心して楽しく過ごせる環境をあばら骨のように周辺街区に広げ、人間性に配慮した町をつくりだしてきた。
バルセロナと言えばランブランス通を知らない人はいない。そこにも人間味あふれるにぎわいがある。札幌と言うと大通、国内外で、札幌で大通を知らない人はいない。ある町のシンボリックな空間や状況を使い、人々は楽しむ。いい意味でき訪者は「自分達もこういう町の中で同じ生活をできたらなあと願う訳です」。

■札幌市の「環境首都・札幌」宣言：
代表的な例はブラジルのクリチバ。クリシバの市長という方は建築家、これを日系のランドスケープをやっている方サポートしています。ドイツのフライブルグでは環境首都宣言をし、「風の道」を意識しながら、広場、道、緑地をつくっています。
今まで、札幌が北海道の経済の中心、生産の中心、商業の中心、日本を支える政令市の一つとして評価されてきたと思います。しかし、此れからはそれに加えて、環境共生都市として高い評価を得るにはどうしたらよいかが問われています。

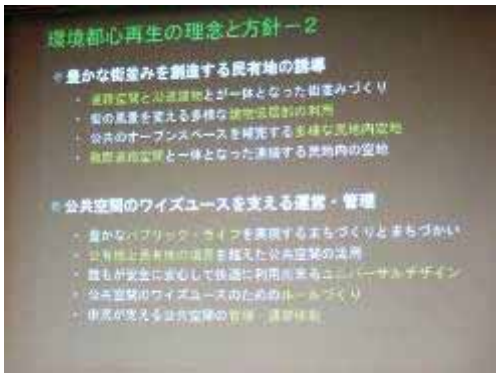
■大通公園、設計から 100 年を経て：
百年前に長岡安平技師が大通公園を描く時には、多分色んな所を勉強しながら、当時、若々しい札幌に提案したのだろうと思います。当時の、大通公園の意図・目的と、それから百年間にわたり積層されてきた意味を考えると、大通公園の性格や位置づけが変わっています。
札幌の都心再生において、当初の中心軸をもう一度再生し、パブリックスペース・ネットワークをつくろうとしています。道庁前の道路に大きな市民広場ができ、札幌駅前の広場があります。狸小路と創成川がクロスする所に「（仮称）狸二条広場」という大きな広場ができます。これまでは大通公園しか、都心に大きなパブリックスペースがなかったのですが、少しずつ都心のパブリックスペースは増えていきます。大通公園が**「本家の長男」**坊みたいに多くの機能を背負ってきましたが、これからは、個々のパブリックスペースの特徴を旨く活かしながら、機能分散をしつつ、機能連携を図る必要があるでしょう。その文脈の中で大通公園の活用も考えていかなければと考えています。
それと、都心再生しようとする時に、市民のため、あるいは環境都市の顔を意識しつつ、同時に、道路と建物、或いは広場と建物、或いは公園と建物というのがワンセットで存在しなければ人は楽しくありませんし、魅力を感じない訳ですから、民有地の建物を如何に協力して貰いながら、市民のための場所にするのかが大事です。
そのためにも「市民が支える公共空間の管理運営体制」づくり、これは如何に町をマネジメントするのかが大きな課題となっています。マネジメントの体制を行政だけでやるのは難しくい、企業だけではできないし、市民だけでもできない。三者が連携し新しい町のマネジメント

体制を考えて行くことが大事です。そのためにも、建物の低層部の機能を何にするか、これは其処のビルのオーナーにだけ任せておくのではなく、各商店街の方にも参加して頂き、内容を決めて行こうというふうに考えています。

グローバルスタンダードを視野に入れると、そこには“いつ行っても人が溢れていて、しかも安全。車が沢山通っているけれど、気持ちもいいし、緑も沢山あるので心地よい”、大通公園には、いつ行っても人が集まり、自由な会話ができる様な場所にしたい。ベンチにしても、兵隊みたいに並んでいるより、ブライアントパークのようなおしゃべりを誘発する空間がいいと思います。

環境に配慮した町を視覚化したいので、「環境都心の風格ある植栽」によって、町の風格を作ることを提案します。2003 年のワークショップの時に、都市景観上の提案として、町のシンボルとなる広場空間というのを造る。手狭になるようであれば、両側の車道の車線を減らしてでも実現しよう。街区と一体になって物事を考えていこう。それから、東から西へ連続し歩ける公園を造っていこう。

環境プロジェクトとして大通公園をどう再生して行くのかっていうことを考えて頂ければ、というふうに思います。環境或いは文化を一つの基軸にしながら札幌はこれまで計画を進めてきましたし、これから、そうしていきたいと思っていらっしゃる札幌市の方、ご参集の方々には、この後のシンポジウムで、刺激的な、22 世紀への文化的な提言をお願い致します。
有難うございました。



※文章の内容については、ランドスケープ実行員会で、小林英嗣先生の講演内容を拝聴して、それをもとに、ランドスケープ実行委員会がとりまとめたものです。

テーマ

大通公園 100 年　これからの 100 年

大通逍遥地の変遷から考える　公園緑地の未来

パネルディスカッション

○「今の大通公園はこうして創られた」
石村 寛人(いしむら　かんじ)さん (札幌市北区土木部長)

☆　プロフィール
1975 年 3 月　千葉大学園芸学部造園学科　卒業
1975 年 4 月　札幌市役所に勤務
造園職として、公園緑地の計画、整備、維持管理に係わる。
大通公園再整備事業 (1988 年 (昭和 63 年) ～1994 年 (平成 6 年) においては、1989 年 (平成元年) から 1988 年(平成 5 年)まで、実施設計と施工監理を担当する。
技術士(建設部門：公園緑地)
現在に至る。

大通公園の再整備を担当した者として、再整備のきっかけとなった時代背景と再整備の話をします。

時代背景

大通公園を再整備しようとした昭和６０年代初めのころは、全国どこの都市も２１世紀に向けてという都市づくりをしていて、２０世紀で培った都市の財産をグレードアップして次の世紀に引き継ごうという熱気のあった時代です。札幌市でも昭和６３年に、旧自治省（現総務省）の「ふるさとづくり特別事業」に着手して、「ふるさとづくり基本計画」を策定しています。テーマは「ふるさとづくり、北の風土に根ざした生活文化都市の創造」というものです。現在の行政のキーワードは、「環境」になると思いますが、当時は「文化」がこれに相当しました。この基本計画には、４つのプロジェクトがありまして、１つには「２１世紀の都心づくり」、２つ目は「文化芸術都市札幌の建設」、３つ目には「健康都市札幌の建設」、そして「生涯学習環境整備」というプロジェクトです。これらのプロジェクトの例として、芸術の森とか生涯学習センターの「ちえりあ」などがあげられます。

１つ目の「２１世紀の都心づくり」プロジェクトは、札幌駅前通と大通の整備であり、大通は、公園と南大通、北大通という街路の整備であり、大通公園再整備と大通シンボルロード整備というものです。この事業に関連して「都心景観要綱」を制定し、大通地区都市景観形成地区を指定して、沿道街区の景観形成を図ることも並行して行われています。これともう一つ関連して、都心部の歩道整備を行う、ロマネット事業があり、歩道の舗装やサイン、照明灯のデ

ザイン化が進められました。
　大通のシンボルロード整備事業は、南北の道路部分２０mのうち、両側の４mが歩道で、公園側にも歩道となっていましたが、公園側の歩道の２mを削減し、ビル側の歩道を６mに広げ整備を行いました。電線を地中化し、舗装にタイルを使い、自然石の植樹桝に大きな街路樹を植え、デザイン化した照明器具、サイン類の設置などを行っています。残った歩道の２mは、車道と公園の拡幅に当てられました。

　大通公園再整備
　公園の再整備ですが、大通公園は、明治２０年ころから牧草の種が蒔かれ、花壇が作られと、公園的な手が加えられ、徐々に市民の憩いの場となって行きますが、第二次世界大戦末期の食糧対策でイモ畑になり、戦後には進駐軍の施設が建設されるなど、公園としての姿を失います。昭和２５年頃から花壇造成が始まり、少しずつ憩いの場へと復帰し大通逍遥地となります。昭和４３年に札幌市の創建百年を記念する事業があり、旭山記念公園の造成に着手していますが、大通公園の整備も行われて、再整備をする前の形ができたものです。各丁目に石積み柵が廻らされ、丁目ごとに広場があり、広場の東西両脇が芝生広場、各丁目を東西につなぐ２本の園路、この園路と南北の街路を結ぶ斜めの園路という各丁目の基本的な形が整備されたものです。
　大通公園の再整備に当たっての基本的な考え方ですが、札幌市の都市軸として歴史的に形成された緑の空間であり、都心にありながら芝生と花壇、木々の緑が市民に愛され親しまれており、この空間をより魅力あるものにして、２１世紀に引き継ごうというものです。

　全体計画
　大通公園を西１丁目から１２丁目、資料館も入れて１３丁目までを、統一的に整備するということがあります。ベンチ、照明灯、車止めなどのファニチャー類や園路の舗装材と縁石などを統一すること、また、公園としての魅力である樹木や芝生の生育環境を改善すること、バリアフリーやイベント対応で平坦化を図ることが全体をとおしての整備方針です。また、大通公園には、西６丁目と９丁目に森があって、視覚的にそこで遮られることから、西１丁目から５丁目までの賑わいのある都心部、西６丁目から９丁目までのイベントや遊びの空間、西１０丁目から１３丁目までの歴史を感じる静かな地区というブロックになり、この中で共通性を持たせようということ、また、各丁目毎にも特徴が欲しいということもあって、全体、ブロック、各丁目という３つを考えて設計に当たりました。

　樹木景観
　大通公園の両側にあり東西に伸びる緑の軸線となっている樹木の生育空間を改善するということは、再整備の大きな課題です。
　大通の公園を含む全体幅は、１０５mですが、両側の道路部分が２０mで、残りが公園の幅で６４mです。この公園部分のうち中央の芝生広場が４０m、東西に通る園路がそれぞれ６mあり、残る南北の６．５mが植樹帯となる部分です。この狭いところにそれぞれ役割を負った樹木が光を受け成育する空間を確保するため、樹木の構成を整える必要があります。公園の外側となる車道側は、ハルニレとかイタヤカエデなどの大きくなる木の列として緑の軸線を強調すること、園路沿いには、ライラック祭りの主役であるライラックの列、その間に丁目の特徴になる木を植えるという構成として、全体の統一性、ブロックと各丁目ごとの特色を出そうとしたものです。
　当時、様々な木が、秩序無く植えられているところが多くありましたが、外側の木が大きく成長して残っていましたので、この列を補強することで、東西に連なる樹木景観の骨格として再生しました。西４丁目では、今回の整備で、ライラック列とする園路沿いに、ケヤキが３本

植えられていて、何とか移植できる大きさのため北側に移植し、ライラックや中高木の生育空間を確保しました。このように、移植できるものは、園内の適所や園外に移植し、過密で移植のための根鉢を作れないものは、伐採しました。

樹木の生育環境の改善ということで、雨水の排水を地下浸透式にしました。雷おこしのような空隙のあるコンクリートの配水管と底が無い大きな雨水桝を砕石で囲み、水を浸透させ貯水する機能も持たせるもので、１時間に３０㎜程度の雨を処理できるものです。これ以上の降水は、オーバーフローとして下水に排水します。

整備の後で、「再整備で木の総本数が減ったのはなぜなのか」と新聞社に聞かれて、公園管理の方は大変だったようですが、日陰の中で、生垣や植え込みのようなところがあり、樹木の生育空間を確保して質の高い緑をつくりますということで、これらを整理したことで、これらの数が多く、総数が減ったものです。

芝生

大通公園の魅力の一つである芝生のことですが、当時は、ほとんどがスズメノカタビラでした。黄色がかった茎と薄緑色の葉が目立ち、なんともひどい芝生でした。原因は、床土の固さで、雪祭りの大雪像などの加重や多くの踏圧で非常に硬くなったものです。山中式土壌硬度計の測定で２５度もありました。また、地下鉄工事の復旧跡で、樹木の植栽用に黒土で埋め戻しをしていても、絞め硬めでカチカチになり、生育障害の原因となっているところもありました。

再整備では、西２丁目から６丁目までの芝生広場は、深さ５０ｃｍまでを火山礫に置き換えて、保水材と有機質を混入して芝床としました。初年度工事の５丁目で、１２月の中旬に張った芝生が、翌年の４月の融雪後には、根が２０ｃｍほどに伸びていました。

有機質として混入したピートモスは、通常７年ほどで消滅するといわれています。もう２０年を経過していますので、芝床に有機質を混入する全面的な改良をし直す時期が来ています。以前の芝生広場は、ななこ垣で斜め横断などの通行を防止していましたが、利用のし易さを図るため廃止しました。

水の施設

都心の憩いの空間としてより魅力的なものにするために、親水性のある水の施設を増やしました。駅前通と大通公園の整備に関する委員会で、昔、豊平川の水が伏流水となり、扇状地の端部となる西９丁目から北大にかけて水が噴出すところ（メムと呼ばれていた）が数多くあり、そこからの流れを再現する水路を西９～７丁目に掛けて造ってはという意見がありました。その意見を取り入れたのが、西９丁目の遊水路です。西２丁目では、新たに壁泉を設けました。再整備では、水の施設のある丁目を５から９へと増やし、それぞれの丁目の賑わいを高めました。

トイレ

大通公園の中には極力建築物は設けないという暗黙の了解があり、トイレがあるのは、西７丁目と９丁目で、丁目線の道路に面して設けられ公園用というよりは、公衆トイレの位置づけのようでした。昭和６３年の再整備の基本計画策定時に、大通公園に面するビルのトイレの調査をしたところ、関係者以外が入ることを防止するためか、１階にはトイレが無く、地下とか２階にある状況が判明しました。小さな子供やお年寄りのことを考えると公園内に必要ということになり、最小限の規模ということで、１丁目を除く奇数丁目に設けることにしました。その当時から、バリアフリー対応が求められるようになり、車椅子利用ができるブースも設けました。

公園の連続化

昔から公園に関係する職員のなかでは、道路で分断されている大通公園を何とか連続化できないかという願いがあり、よく話題になっていました。道庁で行き止まりになる西６丁目線、当時市立病院があった西９丁目線、石山通以西は、交通量が少ないことからすべてをというようなことを言うのですが、私たちが言っても埒が明かないものです。ところが、イサム・ノグチが「道路にブラック・スライド・マントラを置くことを機会に公園を連続化して子供たちの遊ぶ空間を広げては」という発言を切っ掛けに連続化が実現することになったものです。工事の件で中央署に出向いたときに「もうこういうことはしないだろうな」とかなりきつく言われ、「機会があればやります」とは言わなかったことが、今でも気に掛かります。

終わりに

この辺で私の話を終わりにしますけれど、私ども公園に関係する立場として、できるだけ大通公園を良い状態で使ってもらいたい、きれいな芝生の上で寝そべってもらいたいと望んでいます。自分の好きなところに持って行けるベンチも考えました。８丁目では後楽園ホテルからコーヒーの出前を取って飲めたらと考え、白いキャンバスのパラソルの下にテーブルと椅子を置くこともしてみたのですが、如何せんイベントが俄然増え、利用する時間がなくなってしまいました。皆さんもご覧になられてお分かりでしょうが、大通公園をきれいな状態（イベントの仮設物がない）で見ることができるのは、５月の末しかありません。その後はずっと冬まで提灯が付いた状態です。市役所のなかで観光とか経済の部局がありそれぞれの施策や目標があり、大変な思いをしているとは思いますが、私としては、小林先生の基調講演でお話になったように大通公園は、本家の長男として過剰に負担をしています。市内各所にイベント空間ができて、弟が増えているので、そちらの方で受け持ってくれればと考えます。

それで、夢をといわれれば、「大通公園が３倍の大きさだったら」と思います。ゆったりとしたスケールのデザインで造ることができ、もっと良い空間になると思います。また、小林先生が日当たりのこともお話していましたけれど、９月になると南側のベンチには日が当たりませんので、隣接するビルの高さを現状までとして、高さ制限を設けてほしいと思います。

先ほど、再整備する前の姿は、昭和４３年ころに出来上がったとお話しました。それから２０年が経過して現在の姿となっています。

今の姿もすでに２０年が経過しているところが出てきました。この姿は、あと１０年ぐらいは持つかもしれませんけれど、その間、みんなで大通公園はどうあるべきかを考えなければいけないと思います。私は、大通公園が市民や観光客に質の高い多様なサービスを提供する空間になることを望みます。ご清聴ありがとうございます。

○市民から見た公園の利用
石田　哲也（いしだ　てつや）さん
（前田森林公園凸凹クラブ[(財)札幌市公園緑化協会登録公園ボランティア]代表）

☆　プロフィール
（独立行政法人）土木研究所寒地土木研究所
寒地農業基盤研究グループ 資源保全チーム　主任研究員

皆さん初めまして。前田森林公園凸凹クラブという公園ボランティア団体の代表をやっております、石田と申します。多分この会場で、ランドスケープに関しては私一人だけド素人だと思います。ただ、公園を利用した活動をしている立場からお話をして、直接大通公園をどうしよう、こうしようという様なことは素人ですのでお話できませんが、ただ皆さん方にとってヒントになる様なお話ができればいいな、ということでこの場に臨んで参りました。

■　前田森林公園凸凹クラブの概要について

はじめに、前田森林公園凸凹クラブの団体概要、活動内容をお話しさせていただきます。最後に市民の目から見た、公園の利用についてどのように考えているかについて、かい摘んでお話をさせていただきます。

思いの丈は、お手元にお配りした資料に書かせて頂いておりますので、ご一読頂きたいと存じます。

皆さんよくご存知のとおり、前田森林公園は手稲区の端に位置しております。札幌駅と大通公園の位置からだいぶ西の方です。海岸までほんの３～４㎞しかないという立地条件にあり、非常に面白い立地条件にあります。

此処で昆虫相の調査をやりたいと思ったのが前田森林公園との私のきっかけだったのですが、そんなこんなやっているうちに公園ボランティアに引き込まれてしまいました。

拡張園が造成をされて、一昨年度（平成 19 年）完成を致しました。総面積で 59.7ha 程あります。コンパクトに纏まった面積の中にいろんな設備が配置されております。駐車場も大きなものがふんだんに用意されておりますので、非常に利用しやすい形の公園になっております（総合公園）。こういう処は大通公園（特殊公園）と条件は違います。

前田森林公園凸凹クラブとは何？というお話なのですが、実は、札幌市の「緑の基本計画」が改定されるということが平成 10 年頃にありました。平成 11 年 4 月から 3 カ年間に渡って前田森林公園を舞台にして、公園の利用計画及び維持管理に市民参加を増強させようということが本当に出来るかということの実践が、当時の札幌市公園計画課がやられました。このサポーター講座に集った有志で平成 14 年 5 月に旗揚げした、完全なる任意団体です。唯のボランティア団体です。但し、バックアップがやはり必要ということで財団（(財)札幌市公園緑化協会）のお世話になっております。発足当時は少ない人数だったのですが現在は 42 名のスタッフで活動をしております。

どんなことをしているのかというと、本年度（平成 21 年度）のスケジュールでは、4 月から来年 3 月に掛けて、定例会、自然観察会、トンカチ広場、管理事務所と連携したイベントなどをやってまいります。「定例会」は隔月に開催し、全員が集まって「次のイベントをどうしようか」、「新たなイベントに取り組みたいね」など、そのようなことを話し合っております。「自然観察会」は春、夏、秋、冬と、それぞれ１回ずつやっております。一般の来園者の方も対象

にした、フリーな観察会でございます。「トンカチ広場」というのは公園内から出てくる間伐材ですとか建築端材などを利用して、自由な木工広場を主催しているというものです。「トンカチ広場」なんていう看板を立てて、見本になるような工作を沢山並べて、来園者の方に「自由にどうぞ」ということでやって頂いております。電動工具など、危険性の少ないものは皆さんで自由に使えるようにしておりますし、危険性の高いものは、囲い込んでスタッフオンリーで皆さんのお手伝いをしているというような活動です。この活動は、非常に好評を博しておりまして、リピーターが無茶苦茶多いです。最初は子どもさんに引かれて親も渋々入って来るのですが、最後は子どもそっちのけにして親が取り組む、という状態です。自宅に飾る本棚や、椅子を作って、「テーブルが欲しい」とまで言い出します。段々要望がエスカレートして行きますが、頑張って対応しております。

トンカチ広場：自然木・木の実・建築端材を使った自由木工広場

また、樹名板の制作もやっております。これは一般の方は対象にしないでスタッフオンリーですが、連休前、公園が本格オープンする前の段階でやりまして設置をしていくというものです。これも来園者の皆さんに大変好評です。「数年前まではいろんな木が沢山あって面白い公園だとは思っていたけれど、何の木なのか名前がさっぱり分からなくて、それが寂しかった。凸凹クラブの皆さん方のお蔭でこの木は何の木！と分かるようになったのでとても素晴らしい。」ということでお褒めを頂いており、調子に乗って、頑張ってやっております。

樹名板製作･補修

自然観察会の様子について、春早くサクラだけじゃなくて、カエデですとか、その他いろんな木が一斉に花を咲かせます。多分、大通公園にもいろんな木が植わっていますから、こういう自然観察会のような行事をうまく組み合わせてやると、のちほど触れますが、環境教育の実践の場としても非常に有意義な場となるのではないでしょうか。

前田森林公園は来園するのが大変です。自家用車を持ってる方は何とか来れますが、子どもが自転車で来ようと思うと、なかなか難しい。南区の子どもは前田森林公園までは来れないです。でも、大通公園だったら札幌市中の小学生が頑張って行けます。

自然観察会：春・夏・秋・冬に1回

実は私、ネイチャーゲームリーダーという登録資格を持っておりまして、ネイチャーゲームの「森の色あわせ」というゲームなどもやっております。自然教育プログラムの資格を持っている人達との連携というのが前田

森林公園だけじゃなくて、ほかの公園でもゲームする方向へ、つまり、そこから大通公園などへ展開出来たらいいと思っております。
　冬も必ずやります。冬は冬ならではの激しさというのがあります。冬は木の葉がみんな落ちていますから、木の形を観るのには最適です。野鳥がいても木の葉の陰に隠れませんので姿を露わにしてくれていますので野鳥を観るのには最適、楽しめます。
　大通公園の冬どうなっておりますか？

　連携イベントでは、青少年科学館が主催する「星まつり」という星座を観たり、星を観たりというイベントが 8 月の末に 2 日間、土・日に開催されます。この時に暗くなるまでの間の場繋ぎで、工作コーナーなんかもやります。その時にお手伝いしています。

青少年科学館主催・財団共催：「星祭り」での工作コーナー

　それから、市民ボランティア活動の三種の神器、清掃・草刈・花壇。ボランティアっていうと清掃やってるの？花壇作ってるの？と言われるくらいですが、その中でも花壇は我々もやっておりました。今はですね、花壇を止めて、ついこの間までは野鳥の餌用のヒマワリをやっておりました。今年からはちょっとまた衣替えをしまして、粟とか稗とか、雑穀畑にしました。秋の自然観察会に生(実物)の粟と稗を見せてやろうという魂胆です。多分、今の子どもたちは、稲は学校の総合教育で見たことがあると思いますが、粟、稗、麦などの本物を見たことないと思います。公園という公共の場ですが、畑を作らせて貰っています。昔は立派な花壇づくりも管理事務所の協力を頂いて行っておりました。

花壇の植え付け：最近はヒマワリ畑に変身・今年はアワヒエ等雑穀畑

　それからカナールの清掃です。前田森林公園の売りの設備の一つが、延長 600 メートルという運河です。カナールの意味は「運河」です。これはオランダ語でそう呼びます。
フランス語ではカモという意味を持っております。鴨がたくさん此処に来ておりまして、糞をたくさん排泄していきます。お蔭様で糞の清掃に大変手間取るのですが、管理事務所のスタッフと我々で一所懸命綺麗にして一冬越させて、また綺麗な運河で皆さんに楽しんで貰いたいという願いを込めて作業をしております。かつては新聞でも紹介して頂きました。カナールの清掃は春と秋の年 2 回、やっております。

カナール清掃作業支援：春と秋、600m のカナールから落ち葉を除去

　イオン㈱という会社があります。ジャスコとかマックスバリューを経営している会社ですが、「環境」に対してよく投資をする前向きな取り組みをしていて、黄色いレシートキャンペーン

というイベントをやっておられます。毎月 11 日に限って、買い物をすると黄色いレシートが出てきます。其れを自分が応援したいと思う登録ボランティアの箱に投函します。そうすると投函された総金額の 1%が投函されたボランティア組織への商品とか援助などをして頂けるというイベントがあります。これに我々も登録をさせて頂きました。

イベントの際、お店の前でＰＲ活動をしながら「凸凹クラブにレシートを入れて下さ～い！」ということをやっております。前回には 3 百万円程のレシートを集めまして、1%ですから 3 万円程の支援を受けております。

最初にご紹介した、とんかち広場での日除けのテントなども、イオンさんから頂戴して、我々の活動を上手に継続することができるようになっております。

AEON キャンペーンでの凸凹クラブ宣伝ｲｵﾝが実施している地域ボランティア支援事業

野良学校というような取り組みもやっております。これは前田森林公園の拡張区域の一区画に、丁度、隅地のような場所が出来てしまいまして、たいへん利用度がわるいということで何か良い使い方をしてくれと管理事務所の方から相談を持ちかけられまして、北海道工業大学の碇山先生とスタッフの皆さんやダンボール堆肥のくるくるネットさん、管理事務所、手稲区役所のご協力などを頂きまして、コミニュティーファームということで、農育・食育、こういったものも展開しております。小さな面積ですが、たいへん面白いものを栽培することができます。商売用に植えているわけではありませんので、実が上手に付こうが付くまいが構わない！なんか面白いものを植えて、子どもたちに勉強してもらおうと、ゴーヤも植わっています、サツマイモもあります。札幌なのに落花生なんかも植えました。でもとても楽しいです。ということで次に公園ボランティアの役割をお話しさせていただきます。

野良がっこう：拡張区域の一角で展開している「コミュニティーファーム」を共催北海道工業大学碇山ゼミ・ﾀﾞﾝﾎﾞｰﾙ堆肥のくるくるネット・凸凹クラブ手稲区・前田森林公園管理事務所

■　ボランティア団体の信条・次代の担い手に伝えること

公園を造るという、構想から施工の段階、それから出来上がった公園を維持管理する。利活用する。いずれの段階においても公園ボランティアは出番があるだろうと思います。つまり、「市民の力」というのは、いずれの段階でも発揮する場面が必ずある。唯、その場面を上手に行政なり公園管理者なり、ランドスケープのプロの皆さんが上手に提供して下さらないと、市民の側からは、なかなか飛び込んで行くわけには行かないだろうと思っております。それから、ボラン

<<公園ボランティアに関して思うこと>>

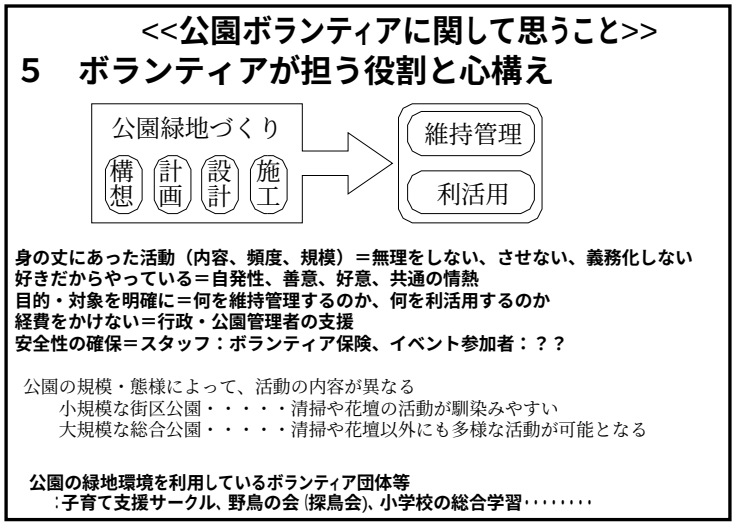
4　札幌市「緑の基本計画」での市民参加の位置づけ

市民ボランティアの誕生は比較的容易。
活動を長く継続していくためには、
**　環境整備＝行政・公園管理者の支援が不可欠**

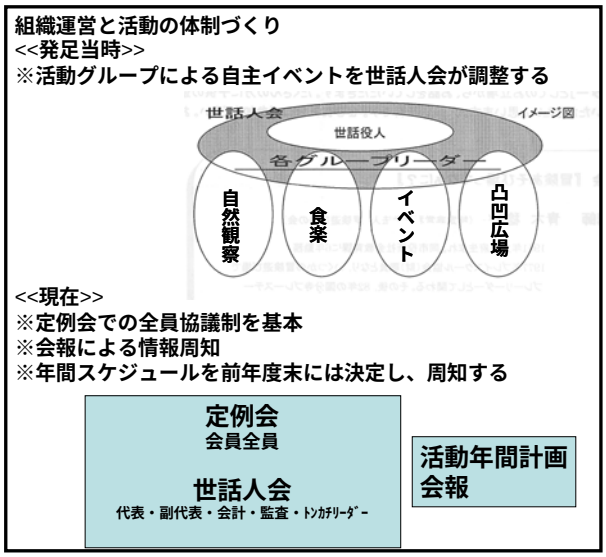
札幌市の公園緑化の根幹＝「緑の基本計画」
市民協働や公園ボランティアの位置づけは？？

実際の行政の対応は？

ティア団体の、信条と言ってはなんですが、気持ちとしては、「身の丈に合った活動」、これは「内容であり、頻度であり、規模」なんですが、「無理をしない、させない、義務化しない」。こういった中での活動でないと長続きできないです。花火のようなイベントを立ち上げて、ハイそれで終わり、ということをやろうと思えば幾らでもできるのですが、やはり、10年、20年掛けて、しっかりとした活動を根付かせて行く、継続させて行くためには、我々の信条としては「無理はしない、義務化はしない」。



ですから私はスタッフのみんなに、何のイベントに誰が来たなどという記録は一切取っておりません。そんな記録を取ると必ず、「あの人は、この前来たのに今日は来ない」とか「誰々さんは何回続けて行事に来なかった」とか、そういう軋轢の基になるのです。だから皆さん方、善意で・自発的で・共通の情熱の下に、好意で作業して下さっている訳ですから、それを大事にして行きたい、と言うようなことでやっております。但し、ボランティア保険とか安全性の確保だけは充分気を付けるようにしております。



当然こういう活動には、行政や公園管理者の支援というものが不可欠です。私としては、公園利用の中に、環境教育プログラムというのをしっかり組み込んでいって、そして次代を担う子どもたちに「公園って、やっぱりいいよね」、「こういう公園がずっと守り続けて貰っているといいよね」、と感じて貰いながら大人になって欲しいと思っております。

環境教育プログラムの中には沢山のものがあります。これらをやっている団体を上手に、公園利用の中に巻き込んで行くということが必要ではないかと思っております。因みに、私はネイチャーゲームと日本自然保護協会が出しております自然観察指導員の２つを看板にして取組んでおります。

■　公園の利用に望むこと

最後です。公園の利用で望むことと言うことで、細かい部分は配布資料をご参照頂きたいと存じます。何時も気になっているのが、総合公園とか大規模な公園と、街区公園とかいう小規模な公園では利用の形態も市民ボランティアの関わり方も、やはり多少違うよということです。大通公園は当然、大きな公園ですので、こちらの方だけお話しさせていただきますが、日常的

な市民の利用、それから非日常的な利用、どうも「非日常的な利用」に重きが置かれ過ぎていて、「日常的な市民の利用」が今一になっている、と言うお話しが先程、小林（英）先生や石村さんからもありました。こういったものをバランスよく組み込まれている公園で、なおかつ基本設備は充分充実していながら、その公園らしい独自の設備がある。こういう公園というのが、やはり市民にとってとても面白い・楽しい公園になって行くし、そこにある公園管理者による基礎的な管理、芝生を綺麗に整える、トイレは綺麗に掃除する、そうした基礎的管理に、我々市民によるボランティア活動が加われば鬼に金棒とまでは言いませんが、鉄棒位にはなるのでは。と思っております。

公園の利用で望むこと（配布資料を参照）

総合公園などの大規模公園では･･･
対になる要素を対立ではなく組み合わせとして適度に配置

日常的な利用 [休息の空間、散歩など]	非日常的な利用 [各種のイベント]
緑の空間(芝生・林)	人工的な遊具
基本設備 [トイレ・自販機など]	独自設備 [その公園らしさ]
市民によるボランティア活動	管理者による基礎管理

街区公園などの小規模公園では･･･
周辺住民の自主的利用管理を主体とし、行政は適宜指導を

雑駁なお話しでしたが、これで終了させて頂きます。

○公園の価値を高め、市民に愛される公園へ
～先進事例の紹介から～
大塚　守康　（社：ランドスケープコンサルタンツ協会会長）

ご紹介いただきました（社）ランドスケープコンサルタンツ協会の大塚です。北海道支部では、本日司会をされている及川さんが、支部長を担当しています。
今日のテーマである「公園の価値を高める」とは何か、「市民に愛される」とは何か、をお話させていただいて、後半に写真による実例を見ていただくことにします。

表題を読みかえると、市民に愛されるためにはどのように公園の価値を高めたらよいか、ととれます。それでは、今の公園は市民に充分愛されてはいないのか、だとすれば、それはなぜか。どのようにしたら市民に愛される公園となり、結果として、公園の価値が高まったことになるのか、という手順で考えていくこととします。ここで、愛されていないというのは、愛されているがまだ充分ではない、とお考えください。

愛されていなかった訳と理由
結論から申し上げると、愛されていなかった訳は、造り手の意識と使い手、すなわち市民のライフスタイルとにズレが起こってしまったことによると考えます。造り手、すなわち公共職の方々や設計者も一生懸命愛される公園を造ろうと頑張っているのですが、その結果が、使い手、すなわち市民の意識やライフスタイルに充分フィットしていないということです。

これは造り手側だけに問題があるのではなく、使い手の方にも原因があったのです。かつて、欧米と並ぶ近代都市を目指して進められた都市計画とともに、近代都市の象徴として公園が導入されました。しかし、当時の市民の生活にとって公園とはかなり距離のあるものでした。

さきほど札幌資料館で勉強させていただいたのですが、大通公園の歴史がこの経緯を良くあらわしていると思います。当初の大通公園は知識階級の発案デザインによるフランス式庭園のような逍遙の地とされていたそうですね。それ以前は官庁街と庶民の街を区分する火除け地であったことも知りました。まさに、お上から頂いた公園を庶民が散策させていただくような使われ方ではなかったかと思われます。また、着物を着てしずしずと歩くライフスタイルでは、今のように、芝生に寝ころんで日光浴をしたいなんて、とても考えられない時代であったでしょう。この頃の公園様式は日比谷公園にも残っていて、日比谷公園には逍遙する園路はあっても、自由なオープンスペースは皆無です。

それから戦後、大通公園には米軍のレクレーション地として、野球場やテニスコートが造られたそうです。これも公園の歴史とよく附合していて、戦後、すなわち事実、近代的公園のスタートとなるこの時代は、児童の遊び場とともに、市民から公園に寄せられる要望は野球場などの運動施設整備がほとんどでした。このスタート時点では、公共の造る側の意識と使い手の要望が、質的にはともかくズレは無かったのです。

ところがその後、経済復興とともに来襲したレジャー時代に入り、国民の意識はより刺激的な遊びを求めて、市民意識はのどかな公園レクレーションから離れていきました。一方、つく

り手は、潤沢になりつつあった建設予算を使って、市民に喜んでもらえる公園つくりに励むことになります。しかし、造り手にとっては手ごたえの無い励みであったのです。市民意識を汲んだ結果のプレゼントではなく、公共が一方的に思案した公園造りでした。そこには、当時の公共意識として、啓蒙啓発意識や管理者としての意識が働くことはやむを得ません。さらにバブル期では、首長さんの公約にまでにされるほどの立派な施設建設が公園に乗るようにまでになりました。造り手と使い手の溝は深まるばかりです。

もうひとつ、造り手にある管理者としての意識について話しておきましょう。

大通公園の歴史で、戦時中は食糧増産のために野菜畑として使われていたと聞きます。当時の土地利用としてはもっともなことだとは思いますが、このように、公園の本質はオープンスペースであるがために、造り手は常に侵略に対する危機感をもっていたのです。そのために、かつての公園でまず先に整備されたのは、外周柵と門柱でした。

また、わが国には植栽のデザイン管理に対し、日本庭園という世界に誇る伝統技法があります。ところが公園ではこれが災いして公園と庭園の混同が生じ、庭園感覚で設計管理がされることが多くありました。管理者としてはせっかく自分がきれいに整えた庭園を、利用者に荒らされたくは無いのです。そこで、入ってはいけない芝生や丸く剪定された植え込みなどが現れ、園内での行動が制限されます。日比谷公園も、公園というよりは庭園のパッチワークなのです。これによって、自由なオープンスペースであるはずの公園は、クローズド　オープンスペースとなりました。

そして今、市民は自主的なライフスタイルを手に入れた

公園がクローズド　オープンスペースや施設満載の空間になる一方で、多様な時代の経験をつんだ市民は自主的に生活を楽しむ技を手にしていきました。公共からこうして楽しめといわれなくても、良質な空間さえあれば、自分で自主的に楽しめるようになったのです。このとき初めて、市民から公園への批判が生まれます。公園造りが歩んできた経緯からすれば、造り手は批判を悲しむのではなく、やっと、公園に対して使い手からの手ごたえが出てきたことを喜ぶべきでしょう。このように、市民生活にとって、公園が不可欠であると思われるようになったのは最近のことなのです。

それでは大通公園の今を見てみましょう

午前中に大通公園を端から端まで歩かせてもらったのですが、小型のイベントが開かれている中で、自由に楽しんでいる市民の方々をたくさん見かけることができました。イベントで用意された野外卓でおしゃべりしたり、芝生で寝ころんだり、とても開放的でゆったりした気分です。このあたりを見ると、大通公園はクローズド　オープンスペースになることを免れているように思えます。しかし、横断道路によって区切られた芝生地には、ほとんどのブロックに彫刻や噴水などが置かれているのに気がつきます。西のはずれには日時計までが置かれています。このあたりにかつての造り手側の意識が残されています。すなわち、空いているだけの空間という頼りなさよりも、彫刻や噴水といった施設の整備場所と捉えたほうが、かつての造り手は安心できたのです。一方で、鑑賞といった受動的な楽しみ方を市民に強いていることにもなります。ところが、現状では、市民は彫刻の端の芝生で昼寝やピクニックを能動的に楽しんでいるのです。市民の自主的な空間の使い方に自信を持てば、造り手は芝生の中に色々と仕込まなくても済むようになるでしょう。噴水にしても、単に見上げるだけの姿ではなく、夏には大人も子供も水遊びの出きるものであったら、どんなにか楽しみが増すことでしょう。市民の自主的な楽しみ方を信じて、良質な空間を用意することが、愛される公園として価値を高めることになるのです。

ところで、大通公園の両側の街並みに目を移してみましょう。札幌駅から薄野へ向かう南北軸の道路に対し、両側の東西軸はなぜか寂しい気がします。これだけの大公園がありながらどういうわけでしょうか。雪祭りなどの大イベントの後、見物客はこの街に留まらずに、薄野に流れてしまうのでしょうか。ずいぶんもったいない話です。これからは公園が街を育てることを考えなくてはいけません。それが逆に、公園を楽しく価値ある空間に育てることにもなるのです。そのための具体策は後ほど事例写真を見ながら考えましょう。

ところで公園の価値を高めるにはエネルギーが要ります

かつて、公園は造られた後に維持管理作業に入ります。ここで、維持管理とは公園を固定化することを意味します。その結果、庭園感覚のクローズド　オープンスペースが生まれます。現在では維持管理ではなく運営管理です。常に、利用者の状況を見ながら公園を動かしていかねばなりません。それには維持管理以上のエネルギーが必要になります。維持管理時代はそのエネルギーはすべて公共管理によって行われていました。その後、運営感覚が強まるにつけ、市民参加やＮＰＯ団体が参加するようになり、今では指定管理者制度によって民間に委託されるようになっています。

ところで、公共の費用以外からエネルギーをもらうにはそれなりのリターンが必要です。市民参加でエネルギーを提供してもらうためには、市民に大いに楽しんでもらわなければなりませんし、それによって生きがいを感じてもらうことも必要です。このような仕組みを考えることがとても大切になってきています。大通公園が沿道の商業に大いに寄与するように改造して、商店にも大きな運営エネルギーをもらえるようにしたいものです。公園と商店がもっと直結してもらうように、両側の道路の車線を減らし、カフェの並ぶ歩道を拡張しましょう。

それでは、公園の造られ方や使われ方、運営のされ方を事例写真で見ていきます。

写真で見る事例

写真 - 1

大阪中ノ島のバラ園です。逍遙鑑賞型の典型的施設です。使われ方は静かに鑑賞する受動的なものを想定しています。芝生はもちろん立ち入るためではありません。

写真 - 1

写真 - 2，3

実際の使われ方は造り手の意向に反して、写真のように使われています。芝生に入り込んで、子供とピクニックをしたり昼寝をしたり。とても能動的です。バラの香りに囲まれて気持ちよさそうですね。

写真 - 2

写真 - 3

写真 - 4

日比谷公園の写真です。遠足に来た子供たちがコンクリートやアスファルトの園路に座り込んでお弁当を食べています。背後に明るい芝生があるのですが立ち入り禁止です。日比谷公園がいかに公園でなく庭園感覚で造られ、管理されているかがわかります。

写真 - 4

写真 - 5

写真 - 5

ニューヨークのセントラルパークです。セントラルパークの地被は想定される利用によって５段階ぐらいに分けられていて、これは最上級の芝生の利用です。最上級はクワイエットゾーンとされていて、ボール遊びも禁止です。絨毯のような芝生で、裸で日光浴です。

写真 - 6

写真 - 6

同じくセントラルパークの、上から２番目ぐらいのグレードの芝生です。散り頻る八重桜の花びらを敷いて、親子が遊んでいます。

写真 - 7

ロンドンのハイドパークです。セントラルパークと同様に、公園とは施設が色々あるのではなく、良質の空間で、自分がのびのびと自主的に行動する所だと言うことを教えてくれます。

写真 - 7

写真 - 8

写真 - 8

公園を出て町の様子を見てみましょう。原宿表参道の様子です。ブティックやレストランの並ぶ街並みに、若者が腰を下ろして行き交うお嬢さんたちを眺めています。立派な並木の環境に浸って、これも楽しい時間の過ごし方です。

写真 - 9

写真 - 9
ノルウェーのオスロです。札幌よりも北国では、短い夏を戸外で大いに楽しみます。花や緑はそのためにも欠かせません。

写真 - 10

写真 - 10
公園のサービス施設を見てみましょう。鑑賞方の施設とは違い、飲食施設は公園を楽しむためにとても大切です。これは日比谷公園で民間経営されているカフェテリアです。公園利用者や周辺のサラリーマンでとてもにぎわっています。サービスには民間感覚が欠かせません。

写真 - 11

写真 - 11
セントラルパークのボートハウスとカフェテリアです。立地を活かしたつくりとデザインがされています。セントラルパークには３段階の飲食施設があって、これはその中間。最上位はリムジンで乗りつけるような高級レストランです。

写真 - 12

写真 - 12
東京の平河町清水谷にある私の愛するカフェレストランです。カフェの向こうに公園の緑が見えます。ここのマネージャーはこの立地を探すのに大変時間を掛けたそうです。２車線の道路には八重桜とハナミズキが咲きます。

写真 - 13

写真 - 13
パリの沿道カフェの様子です。カフェの席数と都市の文化度は比例するといわれますが。パリには大人の楽しむカフェがたくさんあります。緑の木々もさることながら、右手のガラス屋根に注目してください。冬にはコンサバトリーになり、寒さをしのげます。

写真 - 14
オスロのカフェです。パリと同じようにガラスの軒が張り出しています。

写真 - 14

写真 - 15

写真 - 15
ガラッと変わって京都加茂川の床です。なぜこのような写真をお見せするかというと、この床は京都の夏の風物詩となっている仮設造りで、新聞やテレビでも報道されるほどです。大通公園の周辺も、冬の到来とともにカフェのコンサバトリーが明かりをともして並ぶようになれば、札幌の風物詩となれるでしょう。

写真 - 16

写真 - 16
ここからは運営管理に移ります。私の事務所が受けている指定管理者制度による活動状況です。子供たちに紙のカンテラを作ってもらい、夏休みの夜を楽しんでもらっています。

写真 - 17
昼のうちに子供たちとカンテラを作っている様子です。

写真 - 17

写真 - 18
親御さんたちに手伝ってもらい、縁日も開きます。

写真 - 18

写真 - 19

写真 - 19
基盤的な清掃管理などは指定管理者が行います。イベントばかりでなく、そこで得た少量の収入でも、公園の基盤を良質にするために使えればと考えています。

写真 - 20

写真 - 20
縁日などの大きなイベントの後片付けには親御さんたちにも手伝ってもらいます。

写真 - 21

写真 - 21
宮崎緑化フェアの後、都市緑化植物園を楽しむイベント企画もやっています。指定管理者ではないのですが、１０年にわたって、フェア以後のイベントをつないでいます。これは浴衣祭りの様子です

写真 - 22，23，24
大規模な商業施設が整備、運営している事例です。大阪のなんばパークスです。ただの屋上緑化ではなく、商業空間と直結した花や緑は施設全体を大いに個性化し、多くの客を呼び込んでいます。ビル会社は広告費と考えて、多大なエネルギーを投入しています。

写真 - 22

写真 - 23

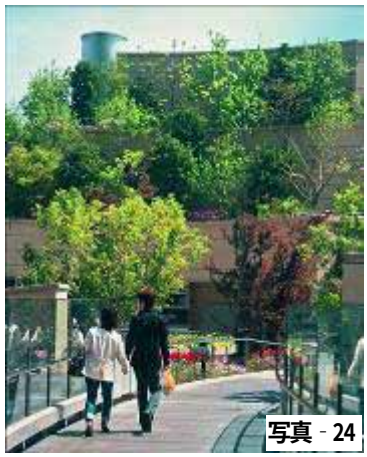


写真 - 24

写真 - 25

写真 - 25
林床に咲き乱れる草花です。小林先生のお話に、大通公園は１５００メートルという規模が感じにくい、というのがありましたが、私としてはその原因のひとつに、公園両側に連なる林帯の存在感にあるのではないかと思います。木々はともかく、林床がかなり荒れています。また、テレビ塔近くでは地下通路などの構造物でさえぎられています。この林床を、視線をさえぎらない写真のような草花で覆ってみてはどうでしょうか。市民活動の花壇造りのエネルギーにも助けてもらいます。北国の札幌では気候に合った手法だと思います。

私の話は以上ですが、日本の憧れである札幌の大通公園が、憧れの象徴となり、沿道の商空間とともに市民から大いに愛される界隈となることを願っています。

パネルディスカッション(第 2 部)

☆ パネリスト
石村 寛人 さん (札幌市北区土木部長)
石田 哲也 さん
(前田森林公園凸凹クラブ[(財)札幌市公園緑化協会登録公園ボランティア]代表)
大塚 守康 さん ((社)ランドスケープコンサルタンツ協会会長、)
☆ コーディネーター(進行役)
小林 昭裕 さん(専修大学北海道短期大学 教授)

※ (以下敬称略、また、coordinator は「co 小林」と表記する)

（co 小林）　コーディネーター役の小林でございます、よろしくお願いいたします。時間は30 分余りしかございませんが、活発なご意見を頂ければと思っております。基調講演から始まり、三人のパネリストの方から多角的な観点からお話しを頂戴したと思います。先ず、会場から承った意見を紹介し、これを切り口にして進めたいと思います。

３件頂いておりますので、そのご意見を紹介したいと思います。

最初のご意見ですが、“ 大通公園ミニ・ツアーの始まりの頃、大通公園の管理が分割されている、というような説明があったと記憶しております。樹木を担当されている部署と、街路灯やフェンスなどを担当されている部署を教えてください。” と言う質問です。これはどなたがふさわしいでしょうか。会場に担当者がおられれば説明頂ければと、思いますが。

（石村）笠さんの説明の中で、例えば、街路の管理と公園の管理ということでお話になったのではないかと思います。多分そうですね、笠さん！

（笠）　（ミニ・ツアー案内役）道路敷と都市公園用敷地（公園敷）が重なっているし違うものもある訳です。

（co 小林）　それで回答としてよろしいですか？

（笠）　日本の道路百選と都市公園百選、都市景観百選、３つ選ばれたと言うことについての話しだと思いますが、敷地は道路敷で両側の道路は道路で管理しておりますが、真ん中の公園の部分は、テレビ塔と資料館を抜いた部分については公園として、道路敷の上に公園として都市計画決定して管理しています。景観について、両側の沿道の建物も含めた景観規制というものが掛かっていますので、これについては民間の方にもお願いし、ご協力頂いて全体として維持をしている。そういう３つの関わりがあるということをご説明したと言うことです。

（co 小林）　それから、同じ方からもう１件、“ テレビ塔は大通公園の一部と思っていましたが、違うのは何故ですか？ ” というご質問です。これは、一般的にそう思われるかもしれませんが。

（石村）　役人の発想かもしれませんね。大通公園の範囲というのは、皆さんからすれば、大通公園は両側の建物とテレビ塔から西 13 丁目の資料館、というイメージでしょうけれども、行政的には、あそこを公園区域にしてないということです。道路を占用してあの施設を建てている、そういう意味で公園でないということです。

（co 小林）　行政的なご説明でしたけれども、宜しいでしょうか。

お二人目の方からは、ツアーについての説明ですが、“ 今回、ミニ・ツアーから外れている資料館、裏庭の整備が大通公園の終点になっていますが、日曜日にも関わらず閑散としています。” 資料館裏側、西側の利用方法 ” ということで、意見がだされています。また、これは、石村さん宛としてご指名があります。

（石村）　また、行政的な話ですけれど、西 13 丁目は教育委員会が管理している所であって、公園管理の手の及ぶ所ではないのですが、今回の再整備の時に一体として多少手を入れています。資料館の後ろは、冗談でありませんが、「カッコウの森」といいます。何故かというと、市内の各小学校の記念樹を植えている所なのです。各学校の森ですから「カッコウの森」なのです。それで、非常に隠れ家的で、落ち着いた所ですから、本来はあそこも大通公園にしてもっと積極的に、というか、資料館（建物）の使い方も含めて、例えば資料館を公園の資料館にするとか、みどりの推進部が入るとか、まあ、色々構想があるのです。大通公園にしませんか？ということで、私が議案を書いて、廻して決済を貰おうとしましたけれども、それ以来、何にも動いていないのが現実です。さて、最終的に何を答えればいいの？

（co 小林）　それでいいと思います。

（co 小林）　（会場の質問者に対して）はい、どうぞ。

（会場より）　私が張本人ですが、表向きテレビ塔に始まって資料館に終わるので、縦横の連携が図られていない。始点と終点が、チグハグですね。テレビ塔の事務所の緑色の色彩は、大通公園の何たるものかを物語っていると思います。で、これを行政の枠内に捉われると、道路を借りているから公園でない、そうはいっても公園のシンボルなのです。市民から意見を聞いてやり直させるっていうことを考えてみたらどうでしょうか。それに、ミニ・ツアーの中でも資料館の裏側にまで行かない、あれは教育委員会だというお話ですけども、最初と最後に行政の変な回答がありましてね、これは裏腹になっているではないかなあと思っている訳です。

（石村）　いい質問には、いい答えが入っているって、よく言われますけれども、本当にいい質問だと思います。少し触れましたけれども、大通公園の再整備の時に道路もやりましたし、周辺の建物に対する景観要綱というのを作って、看板の規制ですとか、例えば駐車場の出入り口を造らないで下さいとか、色々お願いをしています。ですから、本来であれば、テレビ塔の色もどんな色にするかもきちっと議論して塗るべきですし、塗った色が変だったら「変だぞ」ってみんなが大きな声で言わなきゃいけないし、そういうシステムにしなきゃいけないと思いますね。それともう一つ、資料館まで行かないっていうのは見られたくないっていうのではなくて、行く時間がなかったからだと思います。笠さんは色々お話したいことが沢山あったはずですから、来年、ミニ・ツアー２でも仕掛け、裏も見ましょう。

（会場、先程の質問者）　つまり、大通公園という品格に添わないような色、資料館の裏庭の整備、これが今後の課題ですね。過ぎ去った百年は直しようがございません。これからの百年には、両側の南北の通りは芝生に植え替えるとか、自動車を規制するとか、というものが望ましいと思いますし、やはり大英断でしょうね、それから東側を延ばすということ。

（大塚）いいですか。

（co 小林）　ご意見をどうぞ。

（大塚）　たとえば、現在のテレビ塔は遊園地のお土産屋さんのようになっていますよね。やはり公園はもとより札幌のシンボルですから、商業主義に走らずにもっと大事に扱うべきだと思います。それと、東側には創成川の整備が進んでいるんですから、それとの関連から言えば、パリのエッフェル塔のように下を通り抜けられるようにしなければいけません。

また、テレビ塔会社に公園の恩恵を与えるのではなく、周辺にある地元の商業に公園際に立地しているという恩恵を与えるべきだと思います。そのためには、両側の道路の車線を減らし、その分歩道を拡張して、あるルールの下に商店に利活用してもらうと、公園も街も活性化されるのではないでしょうか。そのリターンとして、公園の運営管理にも参加してもらえる有力なエネルギー源であると思います。

（co 小林）　もう１件、ご質問があります。３件目ですが、“大通公園のイベント時の騒音対策についてです。”いろんなイベントが企画運営され大通の活性化には効果的と考えますが、ライヴやよさこいソーランでの騒音は余りにもひど過ぎると思う。若者や観光化がエスカレートし過ぎて落ち着きが無さ過ぎる。もう少し音量を低くする或いは高音域を抑えるなどの必要があるのではないか。（そうすることで）各年齢層、外国観光客に、よりいっそう受け入れられるのではないか。”というご提案でございますが。これはどうでしょう。そのとおりだと私は思いますけれども。この点は後で議論を深めたいと思います。

大通公園でのイベントが、年中続くということについては、最初、石村さんの話題提供の中で、ある象徴的な話題として、「大通公園から提灯が無い時期は５月の末だけど、その時期にしか提灯のない写真は取れない。」という話がありました。それ程イベントが立て込んでいるという事実だろうと思います。これは元々立て込んでいた訳じゃなくて、雪まつりから始まって、夏まつり、いろんなイベントがこの 60 年位の間にどんどん追加してきたのは、イベントによって都市経済が活性化する効果もあって、進めてきたのでしょう。一方、ご意見にあるように何らかの行き過ぎの部分もあるし、小林英嗣先生の基調講演にありましたように、大通

公園が「一家の長男」の役割をすべて担ってきたので、やむを得なかった部分がある。今は、都心再生の中で、全体的に分散をして役割を担っていける。

また、皆さんのいろいろなお話を伺って思ったことの一つは、今日の話題提供にあった、1909 年という時代です。百年前というのは道内にあった公園というのは限られていました。その当時、大通は公園ではなく、火防線の位置づけで、その状況下、大通公園が設計されました。そして、今日至るまで、多くの改修がなされ、積層されてきた事実が眼前にあると思います。いま、我々が百年後をめざして、どのように考えていくのかが、今日のテーマの一つだと思いますので、これについて、考えて頂きたいと思います。

20 世紀初頭、長岡安平が今の大通公園、当時の火防線を設計し直し公園化したということ、もう一つは、皆様のお手元に年表がありますが、私はイベントと花壇について年表をひも解いてみました。冒頭、イベントの話がありましたが、イベントの始まりは非常に早く、明治 11 年、第１回農業仮博覧会から始まります。その後、練兵場ができて、当時の学校連の運動会を西５丁目でやっていまして、地域の運動場として利用される時代に続いて行きます。これが、今日の大通公園、様々なイベントをやって行く端緒であり、それ以降、積み重なって今があるという理解をしていただきたいのです。ですから、イベントだけ見て行くと、先程申し上げた様に、「雪まつり」が 1950 年に始まり、その後「夏まつり」が加わり、「ライラック祭り」、「菊花まつり」が、さらに、「よさこいソーラン祭り」が今から 16 年前に始まって、去年には「オータムフェスタ」が始まり、年中、殆ど隙間なくイベントが行われています。この事実経緯を改めて考え直し、今後の 100 年を見通す必要があります。

もう一つは、石田さんの方から市民のボランティアの３つの話しの中で草刈・清掃・花壇がありましたが、大通公園の場合、実は市民が最初に手をかけて花壇をつくったのが明治 40 年（1907 年）、ある市民が実際に馬耕して花を植えたという事実が今から 102 年前に記録としてある訳です。その後、大正 15 年にまた別の方が北大の先生のアドバイスを受けながら実際に花壇を造っています。その花壇が市民から評価されていく中で、市の直営の花壇になります。言ってみれば市民の手によって始められたものが評価され、公の資産になっていくのです。大塚さんが言われた様に市民のニーズに合ったものを公共がサポートする形になって、大通公園に定着して行ったのだろうと思います。更に、戦後、大通花壇造成の時に造園の業者と市民が共同で花壇造りを始めて、今日に至っている。先ほど、花壇を考える時、花壇の位置をどうしようかという議論が出てきましたね、デザイン上の問題もありますが、このことも頭に入れて置く必要があると思います。

それから、今日、淺川先生もお見えになっていますが、正言をおっしゃっています。大通公園の歩みは独自のものだと述べておられますが、他の都市にはないものです。大通公園には歴史・文化を感じないと小林英嗣先生がおっしゃいましたけれども、これをわかりやすい形で視覚的に表現していく工夫がいるのだと思います。もうひとつ、私の大学時代の恩師、明道（博）先生が、今から 30 年位前にこんなこと書いていらっしゃる。先程の小林英嗣先生と同じ事を、明道先生が書かれています。大通公園と両側の街並みの関係についても、明道先生は大胆な提案をされています。今から 30 数年前におっしゃっていた事を改めて読み直してみて、気づくのは、今ようやくそれが少し形になりつつあるという事実です。ということは、100 年先を見越すとなると、もう少し踏み込んだ発想での提案が求められているということなのだと思います。

残り少ない時間ですけど、これからの百年を考える切り口として少しお話しをさせて頂きました。

さて、パネルディスカッションの話題に戻りますが、先程石村さんの方からお話し頂きましたイベントの話、大通公園のあり方として、5 月の末だけしか提灯のない写真が撮れないという現状に対し、石村さんは平成元年に公園の再整備されたのですが、今後、この問題をどの

ように解決させていく必要があると思っていらっしゃいますか。どういう方法を取って行けば打開策が開けるのでしょうか

（石村） それはやはり、公園をどう運営するかという事だと思います。大通公園を再整備し、本当に人が増えたのです。芝生広場に人がびっしりだし、西 9 丁目の子どもの遊び場なんかも、日曜日、昼ぐらいに行くとビニールシートを敷く隙間がないし、3 丁目なんかもそうです、本当に利用者が増えた、その増えた所にイベントが入って来て、利用する人が変わっちゃったのです。だけど、僕らは公園ですから、いい空間をサービスしたいし、経済局とか観光課の人達は、あれだけ人がいるのだから、其処でイベントをやればもっと人が来て効果的だぞってやるのです。ですから、札幌市民として、あそこをどんな空間にしたいのだということをしっかりと話をする必要がある。例えば、若い人だったら、あそこでデートをして、結婚して子どもが生まれたら、芝生の上でハイハイさせて、という様な札幌市民にとって一つの舞台になる所、人生の舞台になる所なのです。そこが夏はイベントだらけだし、冬になったら雪まつりの雪があって、本当に美しくない状態で、よくないなあと思います。歩道の上は、雪の上に砂を撒いていますから、雪が解けると真っ黒な状態で、春先の清掃するまで、すごい状態なのです。都心のあの場所が、札幌の景気をよくするために必死になってイベントをしなきゃいけないのか。その辺、自分たちが本当にあそこを他の都市から見たら「贅沢だね」って言われる様に運営して行くのか、判断しなければならないのだと思います。

大通の 9 丁目辺りを整備して、ブラック・スライド・マントラを置き、広い空間がありますが、観光客の人は「本当に札幌って贅沢だね」って言うのです。それが僕は札幌市民の一番の財産という気がするのだけど、そうじゃない、単なる空地と思う人だっているわけです。ですから、そういう人達とどう、折り合いを付けていくかって事が道筋かなって思います。

（co 小林） 有難うございます。この問題に、直ぐに正解は出ないと思いますけど、今、石村さんが言われたことは示唆に富んでいますので、シンポジウムの枠を超えて、さらなる議論を続けていただきたいと思います。

二つ目として、石田さんから、市民から見た公園利用のお話しで実際の様々な活動内容を紹介して頂きました。パークボランティアの活動が活性化して行く様子を具体的に知ることができました。お手元の資料の最後の所に書いてありますが、行政と公園管理者、企業、協議会、市民そして環境教育という話をされていています。ここら辺り、少しお時間がなく、言葉足らずだったのかな？という気が致します。

大通公園の将来像として、小林英嗣先生が環境共生都市、世界の環境都市と謳っていく時に、確かに大通公園は誰が見てもシンボルですが、実際に環境教育とか環境に優しい公園管理を行っていくには？　さらに、管理の主体として、大塚さんからお話がありましたように、周辺企業の力をどうやって使って行くのかという所も鍵になると思います。前田森林公園の活動をされている経緯から、環境教育にふさわしい場として大通公園を使うにはどんなことができるのか、あるいはその実現化を阻む壁がどこにありそうなのか、ご示唆頂ければ有難いのですが。

（石田） 自然観察会だとか、環境教育というと何かそれなりにきちんとした材料が整えられていないとできないと思う方が結構多いのではないでしょうか。それは、やり様で解決ができます。樹木が 1 本あれば、充分に自然観察ができます。植物がどんな働きをしているかを、図鑑や教科書で話しをするのではなく、実際に生きている木を目の前に、お話をするだけで随分違う。それから、昆虫などの生き物は体が小さいので、1 本の木の大きさだけで、我々にとっての地球と同じとはいきませんが、大スケールの空間なのです。そのようなことを、現場を見ながら、話しを聞き、自然の素晴らしさに気付くことができます。そこには指導者の力量もあります。ですから、大通公園の中に、手稲山の森や、円山動物園の裏にある手付かずの自然を持ってこなくても、充分な環境教育のプログラムを組んで子どもたちに理解を深めて行くこと

はできるはずです。鍵は創意工夫ですし、そのために環境教育プログラムに携わっているプロの方々とコラボレーションを組んで行ければいい、と思っています。答えになったでしょうか。

（co 小林）　今のお話は、大通公園でも、環境教育ができるというお話しだったと理解します。もう一つ伺いたかった点は、行政と市民の間の中に企業とか、指定管理者、教育機関では北海道工業大学が先ほど出たと思いますし、企業では、イオンが入っていたと思います。今の公園運営管理の中で対象とみなされていない部分だと思います。話題提供では、新しい主体を取り込んで公園管理のスタイルを作られたと思うのですが、実際の課題とか、例えば大通公園で行うとすれば、どのような障壁があるのか、前田森林公園、実際されて気付かれたことがあれば、ご示唆ください。

（石田）　私はですね、レジュメの中で協働のネットワークという言葉で表現をさせていただきました。色んなセクションの人達が一つの目的に向かって、各々の力を発揮させることで、非常に大きな力を生むと思っています。我々、前田森林公園凸凹クラブは幸いにして、自然体で活動をしていながら、色んな人達とのつながりの輪が次々に広がっていきました。何をどうやって工夫したのと言われると、実はお答えをしっかり出せないぐらい恵まれた環境の中でやってきました。ただ、少なくても、財団（(財)札幌市公園緑化協会）の方に公園ボランティアとして団体登録をさせて頂いて、そういう中から色んな繋がりがうまく生まれたのだろうと思います。それから、市民ボランティアは、とても一人じゃ、独力で立って活動できるような強い団体ではありませんから、行政、公園管理者、皆さん方から、ボランティアのサポートをしっかりお願いできれば、末永く地に（足の）ついた活動がして行けるのだろうと思います。

（co 小林）　どうも有難うございます。前田森林公園の取り組みというのは他の公園の管理面にも応用可能な検討課題だと思います。さて、最後になりますが、大塚さんからは多種多様な話題を提供して頂きましたけれども、冒頭のレジュメの“公園の価値を高め、市民に愛される公園”、大変簡単な言葉で一番難しい作業だと思いますが、先程のお話で、恐らく、まだ言葉足らずだった事があると思いますので，先ず、その辺からお話頂けませんでしょうか。

（大塚）　イベントもかつては街の活性化に必要であり、進んで誘致した時代もあったのでしょうが、その当時には隠れていた公園への市民需要が顕在化してきたということなのでしょうね。時代が変わり、市民生活が熟成されてきた結果と考えます。

そこで、公園の価値を高め、愛される公園にするためには、造り手から市民、運営関係者から地域の商店など、それこそ一体になって、公園の目標像を造り上げて共有することが必要だと思います。別な言い方をすると、公園を核とした街づくりでもあるんです。

そこで、形態としての公園ばかりでなく、どのように誰が運営するのか、周辺の商店ではどのようなサービスを提供したら良いのかなど、総合的に考えていく必要があります。

先ほどの事例で見ていただいた私の愛するカフェでは、10 時過ぎに閉店すると、外に並べたテーブルやイスを全部店の中にしまって帰ります。店内はそれらでいっぱいになってしましますが、次の朝また並べるのです。これは、カフェの多いイタリアやフランスではごく普通のことなのです。また、ギャルソンたちはとてもフレンドリーに客に声を掛けてきます。形やスタイルだけでなく、このマメさやサービス精神が愛されている理由です。

また最近、地球環境問題から炭酸ガスの吸収源として、定量的に緑の効用が測られますが、公園や緑の効果はそんなに単純なものではなく、スローライフというか、生活そのものをエコに変える力を持っていると思います。大通公園がそのような総合的な意味で、札幌市民の生活文化の象徴となることを期待します。

（co 小林）有難うございます。(石村さんに)意見がありそうですが・・・

（石村）　イベントが全部駄目だと言っているのではなく、公園を運営して行く時、これがいいイベントであることは基本的に大事なことです。たまたま、ポートランドへ行くことがあって、スクエアイベントやっているのを見て、ニューヨークでもちょっと見ましたが、仮設と撤

収は夜中やっています。直ぐやっちゃう。大塚さんがおっしゃったように、公共空間を使っているという意識がすごく高い。掃除も夜やっている。それは安い労働力を手に入れられるという事もあるけれども。今の大通だと、仮設も撤去も延々と日中にやっている。大事な公共空間を使っているという意識が希薄だと思う。もし、大塚さんがおっしゃった様に、皆さんの貴重な空間を使ってやっているという意識で動いていただければ、そのイベントが愛されるという気がするのですよね。

（co 小林）正にパブリックライフとかパブリックスペースの使いようが問われているという事なのでしょうね。

お三方からお話を頂きましたから、会場からご意見いただきたいと思いますが。

（会場から）　一つの公園で、あらゆるものを充足し完成させるのは無理なことです。大通公園には大通公園なりの価値がある。仮にそこに逍遥地を求めようとするならば、それは中島公園なり、あるいは円山公園に行って堪能してもらいたい。大通公園としての一つの役割がある。そういう観点から思うと、数年後に間もなく創成川の公園（緑地）ができ、それと連動している大通り公園との関わりについて諸先生方はどうお考えなのか？これによって役割分担も変わってくると思います。この事が今までお話が無かったので、もしご意見がありましたら教えて頂きたいと存じます。

（co 小林）　此れについてどなたか、或いは担当されている方、会場からでも結構です。

（笠）　私は立場上、なかなか言いにくいのですけど、私は先程の小林英嗣先生と東京の篠原先生と 3 人で創成川のデザイン検討委員会というのをやっている関係で、その辺りのことは随分議論をしました。先程のテレビ塔の話が一番ネックになっておりました。いわゆるＴ字型の結節点に阻害要因がデンとあることはどうなのだ、と。何となく行政的にはアンタッチャブルな存在だという事もあるようです。少なくとも景観阻害要因だけは撤去して下さいとお願いはしておりますけれども、なかなか動線すら確保できない状況が現実にあります。ただ、創成川については、今までは全く土地利用が無い所に、あのように新しい空間ができることは札幌の都心にとっては大きなインパクトがあると思います。テレビ塔そのものが既に老朽化して撤去を考えなければならない時期が来ていますので、その辺りを踏まえて、先程の色とかそういう問題ではなく、存在そのものについての意見を世論で喚起して頂だければ、解決への道は開けるという気がしております。ぜひとも大きな声を結集して頂きたい。というふうに思っております。

（co 小林）　笠さんへ突然振らせていただきましたが、的確なコメント有難うございます。他に会場から何かご意見はございませんか。予定の 5 時半を過ぎようとしておりますが、パネリストの皆様で何かございませんでしょうか？

それでは、本日のランスケープシンポジウム 2009、1 部から 2 部まで、継続して参加いただいた方も大勢おられます。此れをもちまして第 2 部のシンポジウムを閉じさせて頂きたいと思います。パネリストの方々、参集いただいた方々、どうも有難うございました。

(採録：伊藤　節夫、文責：小林　昭裕)